

PONTE

書くジャグリングの雑誌：「ポンテ」

創刊号



撮影者：青木直哉 於EJC2013

今号の記事

- 創刊にあたり **書くこととジャグリングすること** 青木直哉
- ピザとジャグリングの架け橋 ポンテ **ピザ回し、ジャグリング界にお邪魔します。** そいそい
- 海外ジャグリング紀行（1） **エンポリで初めて出会った質感** 青木直哉
- 編集部より

創刊にあたり 書くこととジャグリングをすること

青木直哉

創刊にあたって短く、びしっと、誰かの素敵なことばの引用などして開始しようと思った。

しかし、ふと、準備号であらかたのことは言ったので、あとは背中で見せてもいいんじゃないか、ということも思った。

色々迷った末、「書くこと」と「ジャグリング」をめぐるこの小さな論考を載せることでそれに代えることにした。直接創刊を宣言するものではないが、この雑誌、「ポンテ」の方向性を捉えるものである。だから、これを読んで、この雑誌がどういうものなのか薄ぼんやりと感じ取っていただけたらよいと思う。ここで表した基本姿勢は、この雑誌が続く限り変えないだろう。そういうわけで、よろしく願います。

さて、話は、書くこととジャグリングをすることの共通点が、少し分かってきた、というところからである。いったいどこが同じだと言えるのか。

*

まずここに至ったいきさつを述べる。卒業論文でジャグラー、ジェイ・ギリガンについて書いたのだが、その時に、いかに「書く」ことが楽しいかということ、そして、本気でジャグリングで向き合うと、どれだけ面白いかということが分かったのである。これは大きな収穫だった。そしてその過程で他にもいろいろと思うことがあった。それについても真剣に考え、少しずつ思想になってきた。

だが一番手短かに言えば、ジャグリングを楽しんでいる自分と、「書く」ことを楽しんでいる自分は、ほとんど同じ理屈で楽しんでいるのではないか。そう感じたのである。今回はそういうところから出発して、少しだけ、書くこととジャグリングすることの共通点について、考えてみたい。

1. 発表する場所がちゃんとしているか否か

結局なんでこんな雑誌を作ったのかいまち編集長にも不明なのであるが、たぶん「ちゃんとしたところで

書きたい」という編集長のおもいから発展しているのだと思う。そしてこれが、ジャグリング自体とつながる。

ジャグリングを披露するのに、ステージでやることもあるし、宴会場でやることもあるし、サークルで、内輪で体育館でやることもあるし、友達に少し見せるために教室でやることもあるし、色々発表の場がある。

だがここで重要なのは、「発表の場がちゃんとしていると、否応なしに、しっかりやらなきゃ、というプレッシャーが生まれる」ということである。だから、こうやって雑誌を作って、「隔週で出します」と言ってしまうと、やはり書くものが違ってくる。舞台の上で、ミルズメスの練習を見せる人はいない。この雑誌にも、Twitterで「つぶやく」程度のもは載せられないのと同じ理由である。それは、「つぶやき」は、一人の勝手な練習だからである。観るのも自由だ、観ないのも自由だ。影で、こそこそ何か言って人を傷つける権利までは認めないが。だからここに寄稿があるにしても、ある程度まとまった量で、自信のあるものを持ってきて欲しい。ここは、こじんまりと小さいけれども、照明はしっかり当たっている、「見られるための舞台」である。だからこの上で今は私が勝手に踊っているが、一緒に踊りたい方がいれば、熱意があるなら同じ床で踊ってもらつつもりである。上手とか、下手とかではない。「見られて踊りたいか」である。そういうところで、書くこととジャグリングは似ている。

2. 人に発表する時の心構え

書いたものは、必ず発表しなければいけないというわけではない。だが、やはり発表して、何かしら言ってもらって、それで、また書く、というサイクルは非常に面白い。その時に、プレゼンの仕方、作風というものがある。ジャグリングと一緒にある。たとえばジャグリングだと、コメディタッチでやる人、真面目なものをやる人、華やかに見せる人、など。いっぱいいる。

書く時も、別にコムズカシく書くのだけがスタイルではない。青木は、結構堅い文章も好むが、そうでない方がよっぽど好きな人だっているし、人それぞれである。だが、どんなスタイルでも、中途半端に作ったものを好む人はあんまりいない。だから、少数からでも多数から

でも、いい反応が欲しければ、やっぱりそれなりに時間を割き、考えねばならない。これも共通点のひとつだ。

3. 究極的には、自分の楽しみである。

だが結局、ジャグリングは、自分がやって楽しいからやるものである。「ボランティアで使いたいから」という人もいるかもしれないし、名目としての「目的」は種々雑多にありうる。だがいずれにしても、自分では無自覚でも、それらの動機は全てひとつの理由に「付随」しているものだと思う。

それは何かというと、「自分がやっていて楽しいから」である。

別にジャグリングは、自分一人で黙々と練習するのも良いし、発表して感想をもらうのもいいし、お金を稼ぐのもいいし、スタイルも色々あるし、アートとしてやってもいいし、そんな考え下らん、と言って技術を追求するのもいいし、全部、ジャグリングである。誰も文句を言う権利はない。全てアリである。だがそれらは、結果的には、全員、自分が楽しいから続けているのだ。絶対そうだと思う。なぜあなたはジャグリングをしているの、と問われたら、きっと「まあ、楽しいからかな」くらいしか言えないのではないかと思う。

そしてこういうところも書くことと少し似ていて、究極的には、「書く理由」というのは、鉛筆を持つと、なんとなく何か書きたくなってしまふ、パソコンで、何か文字で表現したくなってしまふ、ただそういう感じなのだと思う。

*

以上、今回は三点で簡潔にまとめてみたが、今後もこのテーマについては書きたくなる時が来るかもしれないので、その時はこの続編とするなり改めてこの文章を加筆修正するなりしよう。

最後に。

私は使命感で「書く」ことをしない。ただ、この、心の中に生じた感覚を表現したい、という理由で、「書く」ことがあるだけである。ところでやっぱり、それを真剣にやらないと、上手くなかならない。

つまりここまで来てようやく分かったが、私が言いたかったのは、書くことを真剣にやって上手くなろうと

することと、ジャグリングを真剣にやって上手くなろうとすること、これらが一緒、ということなのだ。

人間は本質的に自由で、自分のやりたいことをだらだら適当に楽しむこともできる。それで得られる楽しみもいっぱいある。

しかし気合いを入れて本気で体当たりしていくと、反動は大きい分、それだけぶつかった時の快感が増すのである。

デザインセンスも、装丁も、丁寧さも足りないかもしれませんが、そういう「熱」なら、この雑誌には、あります。でもその「本気」には、素敵な雑誌にしたいな、という思いも含まれているので、やっぱり、かつこいものに、少しずつしていこうと思う次第です。よろしくお願いします。■

ピザとジャグリングの^{ポンテ}架け橋 ピザ回し、ジャグリング界にお邪魔します。

そいそい

2013年の夏、フランス南部の都市・トゥールーズにて、謎の奇声が聞こえてくる。「スリー・ツー・ワン・ピザマワシイイ」...何故かぐにやぐにやな何かを回しているそぶりを見せる。あんなジャグリング道具は見たことが無い。がしかし、よくよく目を凝らしてみると...「ピザ」だ。色が赤かったり緑がかったりするが...ピザだ。ピザってそんな辛そうでベジタブルな色をしていたっけ...?とにかくピザだ。その謎の集団の中に一人の日本人がいた...「そいそい」だ。

僕はこのぐにやぐにやなゴム質の物体・ピザを扱っている自称「ピザ回しすと」の一人・そいそいである。ピザを回してもうすぐ4年になる。大学に入ってから4年間がすべてこのぐにやぐにやな物体と戯れることで終わる。それでもよかった、と思える4年間だと個人的には思う。が、しかしまだまだ技術的には改善の余地が大いにあるのでそこをさらに突き詰めなければいけない。

冒頭のシーンは、EJC(European Juggling Convention)での一コマである。本雑誌『ポンテ』の編

集長である青木くんが、彼の海外の友人に紹介したら「みんなで回そう」、という運びになったのであるが、それ以外にも当イベント期間中は回しているだけで海外のジャグラーが沢山興味を持ってくれ、また話しかけてきてくれた。ピザ回しはジャグリング界ではまだまだ物珍しいものの一つで、初めて見た人たちに僕は毎回説明をすることになる。今回もその必要がありそうだ。

まず、僕の言う「ピザ回し」とは、本来イタリア料理の代表であるピザを回して伸ばすための技術を指す。昔からピザ回しはピザ職人たちが余興でやるものだったのであろうが、それが次第に技術的にも進歩して、とうとう世界大会も開かれるようになってしまった。世界最古の世界大会はイタリアにあるWorld Pizza Showで、今年で23回目を数える。最大300人超のピザ職人が味を競うクラシック・ピッツァ部門をメインに、ほかにもグルテンフリー・ピッツァ部門、ピザをいかに早く伸ばすかを競う早伸ばし部門、さらにはいかに大きく伸ばすかを争う大伸ばし部門などもあり、中でもピザ回し部門個人・団体はこれらの部門の中でも職人たちがアクロバティックな演技を競う異色の部門となっている。ピザ回し部門の出場者は、独自の配合で作った特別製の破れにくい生地を使って3分間演技して予選・決勝で点数を競うのだ。これが大会の中で一番盛り上がる。ひいきの選手の番になると、観客席のあちこちから「ブラボー！」やら、「イエア！！」などなど声にならない絶叫が聞こえてくる。

一応、ピザ回しはこのようにピザ回しは世界大会を頂点に一つの世界が出来上がっている。しかしながら、この世界は「ピザ職人」たちの閉じられた世界である。世界大会の出場資格もピザ職人に限られている。「まあ、ピザ大会の一部門なんだし、仕方ないだろう…」いや、待てよ。ピザ職人に限らず、一般の方にも触れてくれれば、ピザ回しはもっと発展するんじゃないか？ピザ回しの世界に、全く違う技術体系が加われば、もっともっと面白くなるのでは？僕はそう思ったわけだ。

そこで登場するのが冒頭でも紹介したピザ回し練習用のゴムでできたピザ生地だ。職人も使って練習してい

るこの生地は、早々に破けない、という耐久性の高さという点でかなりジャグリング道具に近い（もちろんそれぞれのジャンルの道具にもよるが）。簡単に壊れず、技の練習にも最適だ。これなら、本物の生地の耐久性の弱さにとらわれない新しいピザ回しが見せられるのではないだろうか。

その試みにEJC2013では、ピザ回しワークショップも行い、ジャグラーに実際に目で見て触れてもらう機会を作ったのだがその技術の交流がまた面白かった。ハットジャグラーによるロール・トス系のアイデア、はたまた、ダボ・スターというスペイン発祥の座布団との技術の共通項の多さ、なども目から鱗だった。

ピザ回しはまだまだジャグリングと出会ったばかり。これからが楽しいジャンルである。■

編集長より

初の寄稿です。ピザ回しには、「お邪魔する」という感覚がまだある。これは、「ジャグリングと名指されているものの正体」ということが根幹にあるか。その輪のなかに、入れない。それを起点に考え、アイデアを出すことがピザを流行らせるきっかけになるかもしれない。そいそいが架け橋となるか。

海外ジャグリング紀行(1) エンポリで初めて出会った質感

青木直哉

私が今までジャグリングをしてきたことのある国、を数えると、なかなか多い。イタリア、フランス、フィンランド、デンマーク、ポーランド、台湾、シンガポール、マレーシア...一番の理由は、留学中にたくさんの国を訪れたからである。

そもそも私は旅が好きだ。あの空港を降り立った時の、期待と緊張の入り交じった、込み上げてくる感覚が好きだ。知らないことばを目の当たりにするのも、好きだ。知らないものを見るのが、好きだ。海外に行くときと出会える色々なことが、好きだ。それで、留学に行ったときも、せっかくヨーロッパにいたのだから、と思って格安航空を利用して頻りに旅をしていた。

初めて「海外でジャグリングをする感じ」を味わったのは、エンポリというところ。イタリアのシエナに留学していたのだが、そこから電車ですぐの町である。なぜそんなところで「海外でジャグリングする感じ」を鮮烈に味わったかという、そこでジャグリングの大会があったからである。

大会といっても、別に競技会が開催されるわけではない。日本のJJF（ジャパン・ジャグリング・フェスティバル）の練習のような、みんなで集まる会である。これがすなわち「コンベンション」だ。当時通っていたフィレンツェのジャグリングサークルのメンバーから大会のことを事前に聞いていたので、行ってみただ。

留学に来てから初めてのコンベンション参加で、会場に着いたときには、胸が踊った。もともとEJC（ヨーロッパ・ジャグリング・コンベンション）には行くつもりだったので、その前哨戦だ、というような心持ちで訪れた。

会場は、小さな町の体育館だった。参加人数は、1000人くらいだったろうか。いくつか参加してきたヨーロッパのコンベンションの中では、今思い返せばまあ、普通、と言った程度の大きさである。ヨーロッパのジャグリングのコンベンションの雰囲気をよく保った、愉快的な会合だった。といっても、ヨーロッパのコンベンションなどなじみのない読者が大半だと思うから、説明を付けておく。

まず全体的に、ちょっと雑である。

あまり会に参加する上での規則などは詳しく提示されない。というより、これについては日本のJJFに限って、色々と制約が多い、と感じるので、たぶん日本が少数派なんじゃないかと思うが、とにかく「楽しめればいい」という程度に、皆が適当に譲り合いつつ進行していく。ショーの椅子の予約なんかないから、ワイワイぎゅうぎゅう詰めで観る。屋外であっても、カーペットが敷いてあって、そこで観ることもある。これをなんと表現したらよいか分からないが、「舞台と観客の距離が近い」という感じ。物理的にも精神的にも。なんというか、舞台に限らず、皆結構「近い」。

そして、お酒をよく飲む。

これは基底にある文化の違いもある。だが、ことジャグリング・コンベンションに限っては、みんなとことん飲む。朝から飲む人もいる。彼らにとってジャグリングのコンベンションとは、「お祭り騒ぎ」なのだ。



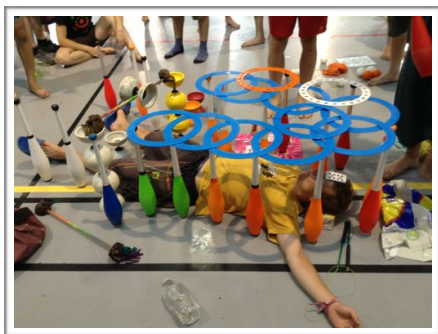
↑夜、外でご飯を食べ、お酒を飲む人たち 於EJC2013

また寝るところがホテルであることは、あまりない。代表的なのはEJCで、ホテルを取る人もいなくはないが、やはり醍醐味はテント住まいである。自分でえつちらおつちら持って行くなり、現地で調達するなりして、「テントフィールド」に、一週間だけ、自分専用の基地を立てる。

エンポリのコンベンションで私が泊まったのは、体育館二階のジムだった。フロアにヨガマットのようなものが敷いてあって、そこで雑魚寝した。そういえばフィンランドに行った時もジムで筋トレマシンの下で寝たことがある。私はジムに割と縁がある。他にも、デンマークでは小学校の空き教室で寝たし、イギリスでは畳が降るなか、テントでうずくまって寝た。

こういう風な、文章にしてみるとよく分かるヨーロッパと日本のジャグリングの集まりとの違いを、エンポリでまずガツンと味わったわけである。

ここで私が人生の大半を過ごした日本に目を向けてみると、そもそも泊まりがけで行く大規模なジャグリングの集まりが、JJFくらいしかない。それも、JJFはお祭り、というよりは、式典、といった感の方が強い。昼からお酒を飲むような人は(たぶん)いない。



↑EJCのジムで寝るとこうなる

それでも最近は、ヨーロッパやその他の国を参考にし、日本なりに面白くやっている、少し「野蛮な」コンベンションも増えてきている。実際に参加していないのでよくわからないが、flow campや428フェスティバルなど、スピナーを中心としたフェスティバルにはそれが多いかも。興味をそそられる。別にスピナーが野蛮だと言いたいわけではないが、まあ、ワイルドな雰囲気を持った人がスピナーに多いのは世界共通だと思う。

ちなみにヨーロッパでは、特に、私が聞いたのはイギリスにおいてだったが、ジャグラーとポイスピナーの間には、やや溝があるという。ポイスピナーに、ヒッピー的なアブない雰囲気の人が多いからである。実際、EJCで出会うスピナー達は、歯が変に欠けていたり、刺青をしていたり、「そこは適切じゃないだろ」と思ってしまうような部位に金属片がはまっていたり、髭がモジャモジャで、髪の毛も長い人が多い。話してみれば優しいし、気さくで陽気で愉快な人たちののだが、はじめはちょっと怖い。

とにかくヨーロッパのコンベンションには、日本で味わえるような落ち着きとは全く違った「混沌」が待つ



↑暑い中みんなゲーム観戦

ている。その面白さの質はことばで表せない。実際にそれを味わうためには、参加者に若干の「強さ」も必要とされる。あまりにも繊細な人には、残念ながら向いていないかもしれない。

「じゃあやめようかな」などと考えず、それでも果敢に参加して欲しいものだが、万が一ホテルでフカフカのベッドに寝て、清潔なホールでジャグリングをすることを欲するのであれば、アメリカのIJAフェスティバルに行くか、日本に留まるといい。

私はJJEが嫌なのではない。ただEJCが好きすぎて、日本のコンベンションが、物足りなく見える。つまりエンポリのジャグリング・フェスティバルを皮切りに、物足りなく見えるようになったのである。

エンポリのコンベンションは、たった2日だけしか参加できなかったが、実に印象的だった。練習する場所も時間もほとんどなかったが、留学に来て初めて目にする、多数のジャグラーが一堂に会する機会で見るとどこか落ち着いた。やはり欧米人がジャグリングをしているとそれだけでサマになる、と思ってしまうのは、日本人が和服を着るとそれだけで落ち着きが良いのとどこか似ている。そしてゲストショーでは、はじめて外国語でホスティングが行われる様子を目の当たりにする。

Mr.Bangという、爆竹を様々な手法で鳴らしまくり、最後にはズボンの中に爆竹を突っ込むというおじさんが大トリで、楽しく終わった。ゲストショーが終わると、フロアには大音量で音楽が流れ始めて、参加者は老若男女皆軽快に踊りだした。とにかく、様々なことが衝撃的だった。前号のエッセイに書いたが、現在も交友が続くリングジャグラーのリッキーと出会ったのもここである。その時は、よもや子供を見にわざわざ島に渡るほどの仲になるとは思いもしなかったが、とにかく彼との交流も印象深かった。なんせ、いきなり「いつかサルデーニャの家に来いよ」と招待されたからである。イタリア人は、平均的に見て、日本人よりもそういうホスピタリティに溢れている。

さて、その時点でまだリッキーの奥さんのお腹には子供もいなかったことを考えると、実に不思議な気分だ。

彼の子供ジュリアちゃんはもうすぐ一歳半である。産まれる、つていくつになってもよくわからないことがらです。ね。

*

さて、このエンボリの体験がもたらした感覚とは、いったいなんだっただろう。

「海外でジャグリングをする」という感じは、いつもこの時エンボリで、Mr.Bangが爆竹を股間に突っ込んでいるときに、フロアで力の有り余ったジャグラーたちが踊っている姿を観ていた時に感じていたものと、同質のような気がする。

私にはこの、「海外でジャグリングする感じ」が、とてもひっかかっている。ひっかかるといっても別に悪い意味ではない。どういうことかという、何か、私のこころのなかで、特別な位置を占める感覚であり続けている、ということである。

単純に、どんなことよりも楽しいから特別なのだ、ということもできる。さらに言うと、これは海外に行く、ということ自体が持っている魅力なのだ、ということもできる。

しかし、私が書きたいこと、また私が書けること、ということで考えると、やはりその海外に行く、さらにそこでジャグリングをして人と関わる、という点にこそ、核があるのだ。それがなぜかを一言で表すことは、できない。

だが一言で表せないからこそ、このシリーズでは、「海外でジャグリングをする」ときの、独特な感じをめぐって、追憶の世界を少しずつ形にしていってみたいと思う。それで何か、すっきりするかもしれない。もっともやもやするかもしれない。分からない。

いずれにせよ私にとって、海外でジャグリングをする、という感じは、「青春」とどこか似た、清々しさと切なさを併せ持った特別な質感を持っているのである。■

(写真は全て筆者撮影、2013年のEJCにおいて。)

編集部より

書くジャグリングの雑誌：ponte創刊です。ぜひ、印刷して、読んでください。紙で読むのと、電子機器で読むのとでは、違います。魂のこもる、紙の方がいいと思います。

この雑誌は、あまり余計なことを巻き込まず、純粹に、主に編集長が書きたいことを書き続けて行く場でありたいと思っています。なんだ、勝手なこと書きやがって、とお思いの方がいたら、その通りです、勝手なこと書いています。ですが、書くときは本気です。勝手な本気の踊りが観たい方は、これからも隔週発行をお楽しみにお待ちください。今は、お茶目なメインキャラクターを作りたい。本気で踊りたい方、お待ちしております。■

記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声をかける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引き返しの出来ない挑戦まで、なんでも下記のアドレスに連絡か、直接どうぞ。■

jugglerna@gmail.com

ponte 編集長 青木直哉

次号予告

前号でジェイ・ギリガン特集を予定、と書いておきながら、諸般の事情で持ち越しとなり、下手に予告を書くとなんかマズいな、と思い始めたので、予告は無しにしようかとも思いました。...というわけで次号は、定番企画に加えて、26日から訪れるシンガポールのジャグリング普及団体のイベントの話でも書こうかと思えます。いや、次回の、次回かな? ■